

2007年訪問活動概略

※2004年中途からは、訪問活動の記録をまとめたものを従来通りの形で公表しなくなったため、参考として、毎回の訪問活動の案内に掲載している、前の回の訪問活動の内容の概略を集めました。

1月13日

・60代女性。長田区で全壊。家族を連れて生活に追われっぱなしだった。今は余計悪い。震災12年いいこと悪いこと含めて一番印象に残ったことは「ここに当たった時にヤレヤレと思ったこと」。

・60代男性。震災6年目に母を亡くし、震災8年目に妻を失い一人暮らし。地震のせいではないと言われる。震災で一番印象に残ったこと「あったかいご飯が食べたかったこと」。

・50代女性、一人暮らし、半身不自由。新築の家に入居できたのは初めて。「一日一日を大切に、私一人やし頑張って、自分の力で第2の人生をしたい」と語られる。

・70代ご夫妻。強いゆれで床が持ち上がり、ああこれで死ぬんだなあ、子どもに会いたいと思って気を失った。神戸の恐怖は今になって口に出せる。未だ睡眠薬を手放せない病状の奥様から「今日はしゃべれてホッとした」と、約1時間のお話し伺い。

1月27日

(記録なし)

2月10日

(記録なし)

2月24日

・60代女性、息子と2人暮らし。父は震災で家も会社もつぶれてやけで酒を飲みガンで死んだ。年金のもらい方についてアドバイス。おもてで週ボラを見て急いで帰宅したと、45分にわたるお話し伺い。

・70代女性、一人暮らし。地震の翌年から統合失調症のご息子の施設へ週3回通う。年金は女性差別で少ないが、健康で前向きに。ここはみんな優しい、子どもも親切だ、と繰り返される。40分。

・80代女性、一人暮らし。小学校の門前、引っ越して1週間で被災。思い出すのもイヤ。2階が1階になり、ご近所の若夫婦のご主人が瓦礫を踏んで上がってきて「ぼくの背中に乗って下さい」と。怪我もしなかった。守られているんですねえ、と心優しいおばあちゃんと50分。

・80代女性、一人暮らし。戦争の時は誰も助けてくれなかった。今の震災は、甘えすぎ。ドーンと身体が浮いて、飛行機が落ちてきたと思った。子どもが高校生の息子が、まずミシンを出してくれた。これが仮設でも力になった。終戦後、息子が1歳で夫を失い、これで生き抜いてきた。今も大手術のあとで力が入らないと言われる。毅然とした半生を45分存分に伺う。

・80代女性、一人暮らし。震災の時も一人。皆、ボケていると言うが自分はしっかりしている。高い薬はいらない。難病指定を受けているがヘルパーの時間を減らされた。見守り推進員が話

を聞いてくれて信頼ができる。「今日も話を聞いてもらえて本当によかった。スーとした。また来て下さい、お仲間によろしく」と90分の上がりこみ。

3月10日

・60代後半女性、夫と子どもと3人暮らし。灘区で全壊。商売を再建できず廃業した。震災後に夫を亡くし今も働いている。家賃が安いからなんとかやっけていけるが、上を見ればきりがな、と明るく気丈に振舞われる。震災で高血圧になり、はじめて行く西区の仮設から灘区の病院に通ったご苦労など、これほどまでと考えさせられたお話し伺いであった。

・70代男性、家族3人暮らし。灘区で被災。自家の工場が全壊で大変やった。震災後にできた借金を返すための生活をしている。家賃が安いからやっけていける。年金は月8万円。借金に月6万円を返す。あと借金は200万残っている。市長はもっと大変だよ、空港造って3千億円から借金してそれ払わないかんのやから、とご自分を忘れて同情的。医療費が高いのにはビックリで病院には行ってない、とのこと。白内障もお金が溜まるのを待っている、と言われる。「あと10年もすれば、この辺で走り回っている子どもらが大人になって、それでようやく街らしくなるんやないか。私らやったら誰ともつきあいがいいけど、子どもらの親同士はクラスや学年が一緒とかで、友達つきあいができるからね」と、示唆に富んだ40分の訪問であった。

3月24日

・30代女性、ご家族多数と。長田区で全壊。10年経ったので言る。他人に話すのは初めて。マスコミ取材は今でも拒否。と40分の貴重なお話しは、母と子と震災救援の感動物語であった。乳飲み子と子どもたちを抱え、乳も出ずミルクもなくお風呂に入れない避難所暮らしの中での、ボランティアやいろんな人々の助けに感謝していると。子どもたちにも命の大切さを伝えていると。地震は弱い方々を傷つける、2度と起って欲しくない。

・70代女性、80代夫と2人暮らし。灘区で全壊。近くのデイホームの避難所を経て2年間の仮設暮らし。同じ仮設からここへ何人か一緒に近所づきあいも多いが、9年も経つと近所で亡くなられる方も増えてきてさみしいと。前向きで非常な元気を感じさせていただいた。

・70代ご夫妻。灘区で全壊。周辺に死体が多数。現在も地元でボランティアをしている。12年経つてのボランティアのご苦労やアドバイスを伺う。重要なお意見は現場でのご苦労を反映。同感できる点多数の貴重なお話し伺いであった。

・70代女性。灘区で全壊。震災のことは忘れたと思っていましたが、こうして話してみると次から次へ思い出しますね。仮設にいる時「いつまで甘えてるんや」と言われて、情けなくつらかったことも今思い出しました。向かいの家の火災の耳塞ぐ悲劇など40分伺う。

・80代男性、ご夫妻で闘病中。灘区で全壊。震災ではご親戚のご夫妻を亡くされた。600軒もある仮設で自治会のお世話を、ここに来て自治会のお世話を。私も体がよくなったらあなたたちの仲間に入れて欲しい。もっと勉強して、社会の役に立ちたい。と感動の半時間。

・60代男性、一人暮らし。灘区で全壊。避難所では大勢の方のお世話をし、郊外の仮設ではまわりの民家の方々によしてもらった、などなど。震災とご家族と趣味のお話しは玄関を出るまで続く。震災の年の春、妻と子が帰郷されそのまま、気になるお話しも床に車座で1時間。

・70代ご夫妻、3世代と。長田区で全焼。火が出たが来ないと思っていたが12時間後、最後に燃えた。「火が走る」状態を見た。何も出せず何も残らなかった。「いざいうたら、頭どつか

行ってまうんよ」。知り合いも5人死んだ。一人は下敷きになっても持ち上げられず「私は死んでもいい！」そう言って焼け死んでいった。人間は薄情なもんや、今住んでいたとこ戻っても誰も知らんふりや。あの時だって助けてくれたのは金髪の若者たちだった。「バカにするだけのモンちゃうな」年寄りの方が自分勝手。仮設で親切にされた時のうれしさも忘れていない。「死ぬまで恩は忘れない」とご夫妻でうなずきあわれた。感動の1時間のお話し伺い。

4月14日

・80代、90代ご夫妻。灘区で全壊。きれいに片付いたお部屋でお話しを伺う。ゴーという音がしてドスンドスンドスン。幸いお怪我はなく近くの学校へ避難。年老いてからの地震はショックが大きい。20年前からボランティアをしておられた。他人に迷惑かかりずにここまで来てよかったと言われる。ユーモアも交えて40分のお話を伺う。

・60代女性。灘区で全壊。3世代4人が無事だった。角地なので車が突っ込んできたと思った。倒れたタンスと飛んで来たテレビに挟まれた空間で助かった。町内で4・5人亡くなっている。運がよかった。仮設も当るのが最後、ここも当るのが最後でこれは辛かった。震災を通じて一番印象に残ったことは、自衛隊の救援のお風呂のこと。命助かったが、生きることもしんどいと、戸口で30分のお話しを伺う。

・50代女性。犬を抱えて出て来られた。犬はここで飼えないので、家で飼って、毎日ここへ連れてきていますと、居住者の娘さん。灘区で全壊、震災で何も苦労したことはない。知人が多く、皆さんに助けられました。動物がいるとなごみますから毎日連れてくる、とのこと。

・70代女性。灘区で全壊。震災はエゲツナイ。人生計画が一瞬にしてつぶれた。2階の子どもたちはすぐ出たが1階の夫婦は閉じ込められた。着のみ着のまま穴から引きずりあげてもらった。田舎に疎開中に、家のもの貴金属など全部盗まれた。なんのためにこの5・60年苦労したのか。娘は振袖を見たくないと言う。友達も亡くなっている。ご主人も病気で亡くなり、前の生活を思い出す。生き埋めの子をフランスのレスキュー犬が助けたのも見た。10年経ってやっと話せるようになったと言われる言葉が印象的だった90分のお話しを伺う。

・12歳、男の子。震災直後に生れた。見せていただいたアルバムには震災3日後にお父さんが撮ったと言われるグシャツとなった家の写真。その家がどこかなど聞いていないと言う。ご両親の想いがこちらに伝わってくるような訪問となった。

4月28日

(記録なし)

5月12日

・60代男性、家族3人。灘区で全壊。「2時言うからずっと待ってた」と戸口でお話し伺い。体調不良を訴えられるが風雅な生活にご努力。母が亡くなり孫が生れた、とお話しを聞く。

・70代女性、ご夫妻2人暮し。東灘区で借家全壊。出勤途上、自転車が飛んで倒れた。タスケテ～という声もあとにして帰った。近所で3名亡くなった。この住宅は行事も多くよく集まる。外部からの応援も多い。震災はすごい怖かったけど、知らない人達とも出会いよかったと、明るいお世話役のお話しを伺う

・80代女性、一人暮し。他に言うこともない、と震災後亡くされたご子息をひたすら追慕され

る1時間のお話し伺い。聞けば、これも震災の被災者と言える。前大戦からのご家族の頑張りを一瞬にして語られる、心に染みる、短い長いお話しを伺う。

5月26日

・70代女性、ご夫妻2人暮らし。東灘区で全壊、負傷。5ヶ月後ご主人は「ようこんな身体で生きていたなあ」と医者にいわれ大手術。震災から12年経ち、震災の風化が言われていますが当事者には忘れることはありません。この住宅で毎日のようにボランティアをしています。人見知りをする私が今では皆さんとこうしてお話しをするようになりました、と、明るくにこやかなお母さん。震災の備えには、懐中電灯と水とスリッパか靴、と体験からのアドバイス。

・70代女性。灘区で全壊。新しい出会いの中で楽しく過ごさせていただいております。今を大切に生かしていただき、皆様と共に日々立ち行きを願っております。(自筆)

・60代男性、一人暮らし。灘区で半壊。地元自治会のお世話。震災の中でのお世話で、感謝よりもいじめを受けたとの思いも。今はここへきて一人だから楽しい。失敗は誰でもある。同じ過ちを繰り返さぬことこそ真の勇気、と語られる。戦争は悲惨、それ以外の何ものでもない、と戦災の歴史も。上がりこみ90分のお話し伺い。

6月9日

・70代女性、一人暮らし。長田区で全壊。2階に寝ていて、倒れた家具で三角の空間ができ、夫と共にその空間で奇跡的に助かった。その夫も80代となり亡くなったが、この団地はよい人ばかり。仮設住宅も郊外であったがよかった。子どもたちも頑張ってくれている、と孫の結婚式の写真を見せていただく。めぐまれている、今後心配ない、と様々60分のお話し伺い。

・70代女性、夫は入院中。兵庫区でお店とも全壊。郊外の仮設は、なれたらよかったが、商売の人脈が絶えて苦悩。ご主人の病気で収入減。12年トコトンまで辛抱したが、先月初めて福祉へ相談に行った。手に職を持っているので老後も大丈夫と思っていたが、地震で客がバラバラになり、病気と入院で力が尽きた。余り外に出たくない。金が亡くなると人は来なくなる。今はむかしの地元の人と三宮でワリカンでコーヒーを飲むのが楽しみと、40分のお話し伺い。

6月23日

・70代男性、一人暮らし。灘区で全壊。避難所が満員で全壊の家を修理して住んだが解体され、仮設住宅にはなかなか入れなかった。西区の端の広大な仮設でのコスモスのお話しに花が咲く。定期を買って毎日のように灘区に戻られていた亡き奥様のお話し。入居して半数以上が亡くなっているこの高齢者復興住宅のお話し。様々な人間模様のお話しに、ひとしきり花が咲いた。

・70代男性、一人暮らし。中央区で被災。最近家の中で倒れて骨折。立っているのが辛そう。戦争や台風や地震や多くの災害に出あった。ボランティアにはよう世話になった。お寺さんが料理を作ってくれたり、いやな時はなかったね。「今日は来てくれてありがとう。久しぶりに外の人と話せた。やっぱり人と話さない。話すといいね。うれしかった、ありがとう」と。

7月14日

(台風のため中止)

7月28日

・70代男性、一人暮らし。灘区で全壊、生き埋め。ポーアイの仮設でお世話役。ここは会話がな
い。仮設の方がトラブルが多かったが、みんな集まって楽しかった。3つの病院に通いながら
もお元気で正義感が強く、「利己主義が増えて政治が悪い」と嘆かれる。戸口で1時間のお話
し伺い。

・70代女性。東灘区で被災。海側のマンションにはボランティアも行政の人も来なくて、ライ
フライン復旧に3ヶ月もかかり飲み水にも苦労された。高齢になり見守り制度があるのでここ
に入居した。病院や買い物も便利で極楽だ。資金をつぎ込んだ建替え問題がまだ残っていると
のこと。

・90代男性。灘区で全壊。仮設を経て姫路の親戚宅へ、5年前に戻る。家賃月1万円。80代まで
現役で全国に実演販売の仕事をして回っていた。阪神大水害に遭い、満州に出征したのち21年
に復員。演芸や映画などの世界もかかわりが深い。戸口で1時間のお話しをお元気にお伺いし
た。

・60代男性、2人暮らし。灘区で全壊。体育館に避難したあとに、奥様の目のため西区のお店に
近い仮設へ。この夏一番の猛暑の中、地面を這うように公園の芝の手入れをされておられ、聞
けば来週にもご自身が入院とのこと。誰もご苦労さんとも言わない仕事だが、何時帰るかわか
らない、今日は短く刈っておく。留守中の奥様も心配。色々考えても仕方がないと言われる。

8月11日

・70代男性、一人暮らし。長田区で全焼。バルンダから降りた。避難所にいる間に全部燃えてし
まった。タンスから何も残っていないからしょうがない。春には仮設に入った。3年仮設にい
た。戦争は15ぐらいから学童動員で空襲の中を逃げて回った。ここでもあまり外へは出ない。

・70代女性、一人暮らし。長田区で全壊。「話は皆同じでしょう」と言われる中を、六甲の仮設
は何にもない不便なところ、ご主人を亡くされここへ入ってまだ5年。ひどい目にあったとお
話しをお伺いした。あれこれと病気が出てきて、近くの病院に通っているとのこと。

・70代男性、一人暮らし。東灘区で全壊。燃える家の火で電線が焼け落ちてまた別のところが燃
える。消火器も水もない。白衣と前掛けとつかかけだけが残った。ポーアイの大仮設で最後ま
で世話役として残った。そりゃー大変だった。あらゆるトラブルがあった。餓死の方が一日で
10人も出たことがあった。3ヶ月して見つかった若い人の検死に立ち会った時は数日ご飯が食
べられなかった。若い人がアル中や自殺に走ることが多かった。ボランティアとして国会に行
ったこともあるよ。仮設時代の人とはまだつきあいがある。1時間を越える尽きぬお話に再訪
を約して、7回忌になる奥様の写真に3人でお焼香をさせていただく。

8月25日

・80代女性、灘区で全壊。何くそっ！と思いながらやってる。あんたらは関係無い人だから
はなしするが、同じ棟の人とやったら話さへん。どうしても悪口が出るやろ。ただこうした話
もどこまで伝わるやろ。震災で、雨露しのげて風も防げて家賃も安い、こんな部屋を当てごうて
くれて、これはありがたかった。

・80代女性、垂水区で全壊。ここでは挨拶以外つきあいはない。千の風になってを聞きながら
本読んで、こんな幸せでええんやろかって思います。団地内に孫も住んでいる。自分自身で満

足しているから書くことなかった。とにかく人に頼らんことです。

・90代女性、東灘区で全壊。ポーンと言うとだけで何だったのか、部屋が沈んだ。声だすところを掘って夫を助けた。土で埴輪のようになっていた。公園でタクシーの中に寝かせてくれた。震災の直前に子どもを亡くしたが、地震騒ぎにまぎれてかえってよかったか、とも言われる。地震は戦災よりひどかったとも。ここへ来てから夫を看取ってご自身もクモ膜下出血に。明るいしっかりしたお嬢さんに介護されて、多くのお話しを伺うことができた1時間であった。

・70代女性、2人暮らし。東灘区で全壊。「忘れますわもう」と言いながら出てこられ、玄関で1時間のお話し伺い。住む場所が変わるたびに「つらかった」と言われる。この棟でも半分ぐらいの方が替わっており、多くの方が亡くなっている。仮設にボランティアが来てくれるのがうれしかった。話しにきてくれるだけでうれしかった。地震は家族仲良くすることを教えてくれた。能登や新潟の方に、自分が頑張ってきた道だから頑張りたい。頑張るという言葉は気をつけて使わねばならないが、でもそういう言葉しかないのです。30年前からのご病気を抱えながらのご努力を、明るく、親しく、お伺いすることができた。

9月8日

・60代男性。灘区で全壊。ダンプが飛び込んで来たナと思った。母が頭をタンスに挟まれて怪我をしたので病院へ連れて行ったが医者が何もできない。電気も水もないので懐中電気を手に入れてきてそれで照らして縫った。避難所ではトイレが困った。着替えもできない。仮設はベニヤ作りでただ寝られると言うだけ。実は震災の年に手術をする予定になっていたが、こんなことになって13年経ってもまだ果たせず、注射も次第に効かなくなってきた。一方、母の認知症がひどくなってきて手術の間の手立てが立たない。地震はほんとにえらいことだった。が、あちこちから助けにきてくれてうれしかった、と。1時間のお話しで窮状が伺えた。情報を伝える。

・70代女性、一人暮らし。東灘区で自宅マンションが全壊。地震の時は起きていたので慌てなかった。夫は乗っていた2番電車が被災し脱線、手摺りにつかまって助かり、自力で抜け出して家に戻ってきた。経営していた会社は、仕事はナンボでもあったのに被災地の人手不足で倒産し、マンションも会社も銀行に取られた。あれは何だったんだ、あの地震さえなければ、と今でも思う。落ち込みの激しさにうつになった。姉は戦争の空襲で亡くなり、父は交通事故で亡くなり、夫はここで病気で急逝した。今被災地が増えているが、うちの方もきつかったよ、と言いたい。お宅らだから言うと、震災倒産した会社名も聞かせてくれた1時間のお話し伺い。

・80代女性。中央区で全壊。仮設で3年、ここで9年。足の悪い夫を施設へ入れてもらう相談に言っても書類に1ヶ月かかり、200人待ちで数年かかると言うんだから。私も世話がえらいと言われる。震災までは働いていてお金には困っていなかった。一人暮らしの人の昼食会や50円でパンとコーヒーが出るふれあい喫茶や100円の喫茶などのことも伺う。

・60代女性。灘区で全壊。手を挟まれて3時間埋もれ、「あ、おった!」「助かった!」などの声を聞きながら救出を待った。ヘルメットをかぶった人が、ずっと助け出してきて、畳に乗せて運んでくれた。助かって外へ出て初めて地震だったとわかった。何も取り出せなかったが、アルバムだけは取り出せて手に残ってよかった。仮設で3年。いい所で、催しも多く、皆仲良くしてた。ここもいろんな行事があり、気がねなく地震のことでも何でも話せる。新しい被災者の方に、私が障害者で皆に助けられたから、みんなさんも頑張ると1時間の話し込み。

9月22日

・80代女性、灘区で被災。訪問を宗教の勧誘と勘違いされ、訪問の趣旨を繰り返して説明する中で、少し開いたドアのチェーンが外れ、やがてドアも大きく開いていった。大阪で生まれ、小さいころは淀川で泳いだ。実家も職人、ご自分も調理学校に学ばれ、結婚して神戸へ。市営住宅に20回もの抽選を経て入居。くじ運がよく早く入れた人で震災の犠牲になった人もいる。運命はわからない。ここに来て3年になるが、買い物に便利で店の人もよい人で、と話しが弾んだお話し伺いであった。

10月13日

・80代女性。灘区で全壊。4時間生き埋めになった。隣の男性は亡くなった。1階は商店のため人が居なかったがベチャンコ。娘が助けにきた。西区の仮設に3年間。ウグイスもなき、芋掘りやカラオケを通じてお友達もできた。田舎のお寺や近所の小学生たちから慰問やお返しの訪問などもあった。ここは近所が良い人ばかりでカラオケも合唱もあって良い。ボケないように手芸もしている。宝のような手芸作品を頂く。新しい被災地の方に「災害で貧乏になるが、元気で頑張ってください。亡くなった方の冥福を手を合わせて祈っています。」

・70代男性。灘区で全壊。奥様が、落ちてきた屋根や天井にはさまれて、大怪我をし、3ヶ月余り入院、歩けなくなるほどだったが、今は杖をつけて歩ける。ご自分も震災前の大手術の薬から内臓悪化、透析の手前まできている。「困ったことといえばやっぱり身体のことだね」と。

・80代女性。灘区で全壊。戸口まで出て来られたがベットまで戻られ、4人でベットを囲んでお話しを伺う。ゴーという音がして飛び起きた。ネコが飛んで逃げたがそのまま戻らない。2階が落ちて1階の床下から顔を出して、となりの人を呼んでいた。何が何だかわからなかった。助けられて外に出てはじめて、隣の家もひっくり返っていることがわかった。道端に座っていたら息子が来ておんぶして北区の家まで連れて行ってくれた。それきり勤めていた会社も辞めて息子の家にいたので、被災地の様子については判らない。親戚に守られてつらい思いもしていない。フツーできた、しあわせ、とシツカリとためらいのないお話をベットからみんなで伺う。

・80代男性。灘区で被災。学校で避難所生活、仮設に3年いてここにきた。各所でお世話役をして、いまもここでお世話を。地震の日に助け合い、埋まっている人を掘り出したり、食料を分け合ったりしたのは近所の人達だった。住民の力、一人一人の力、近所友達の絆がいざという時に力になる。まちづくりは一日や二日では出来ない。一人一人に話しをしなければ。何でも聞いてあげて、その人の良いところに乗ったらよい。良いところだけでつながる。ダメならあとで。電線も地下に入れて消防も入れる、建物はOK。あとは人間づくり。見本になるまちづくりを、と多くの実践をみんなで伺った貴重なひとときであった。

10月27日

・70代男性、一人暮らし。灘区で全壊。猫と一緒に住み、近所の方のお世話をしている。震災時に頭を打ち、今も月10万もの医療費に悩むが、そのときは近所の人を助けるべく、無我夢中で裸足で駆け回った。長年家庭をしっかりと支えてくれた妻は「娘助けようと自分が死んだ」。以後、他の女性を好きになることもせず、今でも一人暮らしの女性の部屋に入るのに躊躇する。

・(あと1軒お話し伺い)

11月10日 450回

・70代男性、一人暮らし。灘区で全壊。着の身着のまま向かった最寄りの避難所はいっぱい入れず他へ。3日間食料支給なかった。仮設住宅がなかなか当たらず、市役所で「当たらなければ首吊るぞ！」と言ってやっと入れた。長年の力仕事のため「頭のとっぺんから足の先まで悪いところだらけ」だが、治療を受けているのは一部だけで「死ぬの待たなならへん」と。幅広くこなされた仕事のお話しは、高度成長期を担ってこられた経験を伺う貴重な社会勉強の機会でもあった。

11月24日

・70代男性、一人暮らし。灘区で全壊。仮設住宅がなかなか当たらず、姫路のはずれへ。周囲であった孤独死に心を痛めた。復興住宅もなかなか当たらず、1DKに絞って申し込んでやっと入居。震災後、それまで減っていた仕事が一時的に増え、「震災のおかげと言うたらいかんけど」転職せずに済んだ。3~4年前まで仕事をしていたが、仕事仲間に金を使い込まれ廃業。今の一番の望みは体調が良くなること。大きな病院に行ったら、ろくに診察せず、病状もきちんと聞こうとしない医師の態度に怒りと不信をおぼえた。一緒に伺ったメンバーが同年代であったことから、アドバイスや情報交換をするなど話が弾み、お話を伺うとともに双方向的コミュニケーションとなった。

・70代、90代女性、姉妹2人暮らし。東灘区で全壊。北区の仮設から民間賃貸住宅へ。高い家賃に苦しんだ上、復興住宅になかなかあたらず、シルバー枠でここにやっと入居。引っ越しの負担も重かった。長く陶器を商っていたためか足腰が強く姿勢もいいのが印象に残った。

・60代女性。灘区で全壊。これまで2度水害に遭い、今度で3度目の被災。石垣を支えられえて壊れた家の下敷きにならず九死に一生を得る。ご主人は震災の時、駅のホームにいて、はしごを持ってきて道路に出た。近く年金生活になることが不安。震災当時50代だった「私達のような世代は何も役所からの支援がなく、本当に苦労した。もっと働いている世代も救済してほしい。震災直後に何も無いのは同じだから」と問題提起。中庭の東屋で、お友達の方と話されているところにお話し伺い。

12月8日

・60代男性、震災前から一人暮らし。灘区で全壊。近くの小学校に避難したら、玄関ホールしか場所がなく、コンクリートの上に敷物と毛布だけで寝て、電気コンロで暖をとった。三田の仮設から長時間かけて仕事に。出勤途上に見た長田の焼けあとが戦災みたいですごかった。椎間板ヘルニアのため退職、退職金もほとんどなかった。震災の時の政府の対応の遅さ、行政機関の安閑とした態度に不満をおぼえる。

・60代女性、一人暮らし。灘区で全壊。故郷を思い出すのだろうか、ハイビスカスの植木を育てている。強い警戒感から部屋の鍵をいくつもつけて厳重にしている。ここでの生活は「おもしろくない」、「仮設の方が良かった」と。

・70代男性、一人暮らし。灘区で全壊。とりわけ多くの方が亡くなった地区だった。今も復興住宅で近隣の方をお世話されている。「震災のとき死んでいた方が幸せだった」と思うことがあると、上がり込んで1時間20分にわたるお話し伺い。

12月22日

・70代女性、一人暮らし。灘区で全壊。裸足で火の近くも通って離れた避難所へ。エアコンが効かない夏の暑さや冬のすきま風に苦しめられた3年間だったが、人間関係があって「仮設の方が住みやすい」、復興住宅は「ドアひとつ閉めたら、一日中口聞かないことがほとんど」で「10年住んでいても上にどんな人が住んでいるか知らない」と。部屋で放し飼いの手乗り文鳥と一緒に遊んだり、クリスマス前ということもあって、参加者の一人が「きよしこの夜」などを歌う中での2時間にわたる今年最後のお話し伺い。